

裸者と死者

映画文学人生論

The Naked and the Dead (1943)

『裸者と死者』山西英一訳 「新潮文庫」
映画：1950年 監督：テオール・ウォルシュ
出演：クロフト軍曹 アルド・レイ
カミングズ将軍 レイモンド・マッセイ
レッド ロバート・ギスト

「日本人（ジャップ）って、まったく奇妙な人間だよ、ねえ、ワカラ」 「バカなんです」

ノーマン・メイラー『裸者と死者』は第二次世界大戦で日米戦争の戦場の一つになったフィリピンの戦いを描いた小説。日本人作家の作品には大岡昇平の『俘虜記』『野火』『レイテ戦記』があるので比較しながら読むと興味深い。

たとえば、大岡昇平の作品には露骨な性描写はみあたらないが、山西英一訳『裸者と死者』は昭和二十五年にワイセツ文書の疑いをかけられている。Fuckという英語の原文を卑猥な日本語に訳したのが問題視されたようだが、GHQの圧力で禁書扱いは解除されたという。

しかし、検閲官の心証を害したのは、それだけではない。むしろ銃後の妻であるアメリカ人女性の性道德の乱れやアメリカ人兵士の愛国心の描写への反発が強かったのではないかと思われる。

特に主な登場人物のカミングズ将軍とクロフト軍曹は二人ともそれぞれの妻のことを売女（ばいた）とののしる。夫が国家のために戦争で留守中に男と遊びまわっているからだ。

日本では軍人の妻は貞節を守ることが期待された。そうでないと、兵士の士気がおとろえ、大和魂を発揮しにくくなると考えられた。

ところが、売女を妻とするカミングズ将軍は有能な指揮官であり、クロフト軍曹は勇敢で冷酷非情な鬼軍曹だった。けっして弱い軍人ではない。



裸者と死者

映画文学人生論

カミングス將軍やクロフト軍曹に反抗的な態度をとる元炭鋳夫のレッドは「いったいなぜおれや日本兵（ジャップ）に反対しなきゃならんのだ？もしやつらがこの密林（ジャングル）を占領してたら、おれが困るとでもきみやおもうのか？」

「この世に善良な将校なんてあるものか。われこそ貴族の仲間だと、やつらあ考えてるんだ。だが、カミングス將軍は、おれとちつともちがつてやしない。將軍の糞だって、アイスクリームみたいな、においはけっしてしゃしないよ」という。

そんな態度をとりながらも、レッドは戦場では有能な古参兵士だ。ホンネの言いたいことを自由に言い、愛国心のたてまえを否定する兵士が戦場では自主的にきちんと仕事をするところにアメリカ軍の強さがあったのかもしれない。

それにひきかえ、日本軍ではタテマエの愛国心が重んじられていたが、ホンネはどうだったか。

イシマルという日本軍少佐の死体から日記が見つかった。軍事上の情報こそなかったが、ホンネらしき内心の偽らぬ告白がある。それはアメリカ軍には絶対に知られたくない情報だった。

「日本人（ジャップ）って、まったく奇妙な人間だよ、ねえ、ワカラ」

「バカなんです」と、日系の通訳ワカラ少尉はそっけなく答えた。

今宵われは思う。

われは至高の存在、天皇を信ぜず、

わが偽らぬ心の告白。（イシマル大佐の日記）